

Newsletter 31

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第31号 / 2017年11月30日発行

Contents

- 巻頭言 土地の名・名—日吉
特集I 基盤研究「教養研究」
特集II 「日吉学」「情報の教養学」
特集III 「庄内セミナー」「かドベヤ」「日吉行事企画委員会 (HAPP)」
特集IV 「教員サポート」「学習相談」
特集V 「研究の現場から」 読書会推進企画「晴読雨読」
活動予定 9月～2018年3月
私の〇〇自慢



土地の名・名—日吉

教養研究センター副所長
新島 進 (経済学部)
Susumu Nijima

文学部に合格、入学することになり、日吉という土地の名をはじめて聞いた。ひとり暮らしに憧れ、家から通えない距離ではなかったが、親に頼みこんで、ひよらの元住吉方向、坂の途中のボロアパートに下宿させてもらった。そして翌々年—まあ、いろいろあって—三田の仏文科に進んだ。その後、修士を出るまで通ったから、学生としては三田にいる時間のほうが圧倒的に長かったわけだ。今でも田町駅を降りると自分をとり戻したような気分になる。

だから日吉はほとんど素通りしたとっていい。けれど時というものの性質で、日吉での一年間のさまざまな光景は今も不思議と頭にこびりついて、ほかの多くは忘れてしまったのに。ひとこと言えば鬱屈していた。所属していたサークル、SF研究会だけがほぼ唯一、外界との接点だった。周りの学生とは馴染めなかった。授業にもあまり出なかったのが結局、留年して翌年、実家に強制送還された。いわゆる「黒歴史」だ。ただ、小説だけは読んでいた。夏休みには丸一週間、昼も夜もなくアパートの布団にゴロ寝して、ユゴー『レ・ミゼラブル』を読んだ。秋になり、履修していた自由研究セミナーで、担当の小湊昭夫先生から「夏になにをしていたか?」と問われ、読書のことを話すと眼を細めてくれた。『レ・ミゼ』を読んだのはまったくの偶然で、先生がユゴーの専門家である

のを知ったのもずいぶん後になってのことだ。

日吉の一年からおよそ二十年後—とにかく、いろいろあって—私は新任教員として日吉に戻ってきた。三田にあがって以来、ほとんど訪れることのなかった土地に。小湊先生とは同僚として再会した(ちなみに日吉では、フランス語は比留川彰先生に教わり、片山左京先生の授業も受けていた—お三方とも、私が現在所属している経済学部のフランス語教員だった)。学生時代の鬱屈はなにか別のものになり、今の私は良くも悪くも大人になっている。私は出席に厳しい教員だ。

日吉に戻ってきていちばん驚いたのは、突如現われた銀玉と来往舎だった。学生の頃、今の来往舎の場所になにかあったのかまるで思い出せない。当時のことを覚えている先輩方から聞いて、なんとなくイメージができるも、それは記憶を捏造したものだろう。サークルで撮ったビデオも残っているはずだが見返す勇気はない。ともかく、その来往舎の住人となり、微力ながら、来往舎をホームとする教養研究センターの活動にこれまで携わってきた。そして早くも十年が経とうとしている。

センターに、ひいては日吉になにかができるのか? 大人になった私はクソ真面目に考える、企画を立てる、講義をする。それに興味関心を示し、ともに考え、フィードバックしてくれる学生が一定数いる。だが、私は日吉でたまに出会うのだ。自尊心に押し潰されそうになりながら、授業にも出たり出なかったりの、一年生の私に。私はその彼、彼女にとりわけエールを送る。そしてできたら、なにか小説のタイトルでも教えたいと思う。それがおそらく、私が本当に日吉からもらったもの、そして日吉に返せるものなのだから。

第四校舎B棟教室の教壇。当時のものとは異なるけれど、なぜかこの机を今もよく思い出す。教員を目指すことになった原点かもしれない。それがどんな道のりになるか、まるでわかっていなかったけれど。



基盤研究 「教養研究」

講演会 no.1 西村太良名誉教授「オイディプス王を上演する」

教養研究センターは2017年度より、基盤研究「教養研究」を開始しました。「文化」、「古典」、「成熟」…といった言葉を足掛かりに、まずは、歴史、地域、対象を区切って、知識を積み上げ、その中に、ある共通項が存在するという仮説のもとに、折に触れて統合的に振り返り、「教養とは何か?」「教養はどのような役割を果たしてきたのか?」「教養は何のために必要か?」という問いへの答えを模索していきたいと思えます。

研究会の第1回は「研究講演会」と位置付け、2017年5月10日18時15分より、西村太良名誉教授に講演を依頼し、来往舎シンポジウムスペースで行われました。西村先生は、西洋古典学、古代ギリシア抒情詩・悲劇、現代ギリシア語を専門領域とされ、また、日吉主任、文学部長、常任理事として特に日吉の教養教育に深く携わった経験をお持ちです。当日、先生は、数年前に日吉でおこなった「オイディプス王を上演する」という授業を例に、ギリシア・ローマ文学と現在の大学生の接点をどこに求め、古典をどのように受容していくかという問題について講演をされました。紀元前427年頃に制作されたとされる『オイディプス王』は、古典中の古典として現在でも広く読まれています。それが現代の学生の心の中に深く印象付けられるためには、学生自らがその世界を「体験」しなければなりません。その為には、古典古代の世界に自らを投げ入れ、『オイディプス王』の時代と場所に戻って体験する方法と、逆に『オイディプス王』の物語と台詞内容を現代に引き寄せ、自らが現実と直面している問題に翻訳して体験する方法があります。西村先生の講演は、特に学生がオイディプスの問題を自らの問題に引き寄せ、それによって自らの教養として消化していく方法を示して下さいました。

当日は、古代ギリシアのデュオニソス劇場風の半円形に机を配置し、小菅の司会によって約30名の参加者を得て開催されました。1時間の講演の後、30分程の質疑応答の中で、西村先生は、伝説的なプロジェクトである東大ギリシア悲劇研究会(ギリ研;1958年開始)と恩師久保正彰先生にも触れ、自らのギリシア古典体験も話してくださいました。聴衆には、かつて日吉での演劇教育に尽力された楠原借子名誉教授、また、ギリ研にも深くかかわった毛利三彌元日本演劇学会会長も来場されて、活発な議論が行われ大変有意義な時間を過ごすことができました。

今回は、片山杜秀教授コーディネートのシンポジウム(別掲)を挟んで、本年12月12日(火)18時15分より、毛利三彌先生による研究講演会が行われます。皆さまのご参加をお待ちしています。

(小菅隼人)



講演中の西村名誉教授

シンポジウム no.1 「日本の近現代を“教養”から考える」

教養とは何かを考えるシンポジウムのシリーズ。その第一弾は「日本の近現代を“教養”から考える」(10月28日、13時から)。お招きしたのは竹内洋氏(京都大学名誉教授・関西大学名誉教授・関西大学東京センター長)と筒井清忠氏(帝京大学文学部教授・東京財団上席研究員)。お二人とも近現代の日本を研究して大きな成果を上げてこられました。しかも、竹内氏も筒井氏も社会学者なのです。竹内氏は教育社会学、筒井氏は歴史社会学がご専門です。

竹内氏の興味を中心は学歴でしょう。近現代の日本の歴史の各段階で、社会で地位を得ようとするには、どのような学歴が求められるか。そこでの学歴とは、狭義にはどこの学校で勉強したかなど履歴書に記入できる経歴ですが、広義には教育によって身につけたもの全般を含むでしょう。「さすが大学出は違う」と世間で言われたとき、日本の近現代の各時期でその台詞は何を意味するのか。そこには「教養の有無」が関係しているはずだし、「教養ある高学歴者」のイメージもたとえば大正時代と戦後高度経済成長期では異なるでしょう。物腰が違うとか、言葉遣いが違うとか、申しますが、ではどう違うと「教養人」になり「ヘンな人」になるのか。竹内氏の目はいつもそういうところに向いています。

一方、筒井氏の関心はというと、やはり気分でしょう。時代を包む気分とか、特定の社会集団を支配する気分とかはいかに形成されるものなのか。そこから筒井氏は、日本近代で教養というときには、書齋やサロンや教室で読書や思索や議論や社交を通じて完成するだろう近代西洋市民社会的教養とは違う、「修養主義」の気分が大きくなるの言ったのではないかと考え、「日本的教養」の正体に迫って来られました。修養の概念は、儒教道徳や武術の道場や禅などと不可分でしょう。儒教で教養と言え「身体を養う」のが「養」なので、教養は知識や思考の次元では済まず身体性の次元へと被ってきます。「日本的教養」はそちらも込みにしないと成り立たないのかもしれない。そこは教養研究センターが「身体知」という授業を長年、設けていることとも繋げて考えられる事柄です。また筒井氏は時代の気分を作り出す歌謡曲や映画にも格段の興味を寄せてこられました。

シンポジウムでは、まず筒井氏が『近現代日本の教養を見る視座』と題して、ついで竹内氏が『「知者」の教養と「治者」の教養』と題して講演され、お二人の日本と教養への長年のこだわりのエッセンスを御披露頂きました。それから、筒井氏と竹内氏にコーディネーターの片山杜秀(教養研究センター副所長)が加わって、鼎談『日本の近現代を“教養”から考える』を行い、講演内容をフォローしながら、さらに話題を広げて、幕となりました。「教養とは何か」を問う基盤研究のための大きな見取り図とたくさんの課題を頂戴しました。



(片山杜秀)

右から竹内氏、筒井氏、片山氏

日吉学 「縄文編」

日吉でイルカ?

2017年度の日吉学「縄文編」は、「縄文時代から現代の我々が学ぶことはなにか」という課題を設定し、最終日11月3日にグループ発表と学生・教員による合評会を実施しました。

初回(9月30日)は日吉学の趣旨を不破(経済学部)が説明、考古学の安藤広道先生(文学部)が日吉一帯の縄文遺跡の講義。1万年に及ぶ縄文時代には気候変動や人口の増減、土器の造形に多様な変化が生じたにもかかわらず「縄文」と総称する可否を問われ、これまでの「常識」を見直すべく問題意識を喚起された学生は、年代順に配置された縄文の遺物を手に、安藤先生との対話を繰り返します。軽やかで精緻な亀ヶ岡土器の芸術性の高さ、精巧な漁撈用鎌や装身具からは当時の食生活やものづくりへのこだわりを体感。過去の遺物が発する豊かなメッセージを存分に受け取りました。

10月7日の地理編では、太田弘先生(普通部)と藤森孝俊先生(普通部)が講義担当。温暖化で海水面が上昇した場合の「海岸線」を地図に描き日吉の縄文に想像を膨らませます。海進時に蝮谷は水没し海深は20~40メートルに達し、水温は亜熱帯でイルカや鯛、ヒラメが食卓に上がるとのこと。前回の漁撈用鎌の記憶が結びつきます。さらに古生物地理が専門の芝原暁彦氏(地球技研)の地球規模の講義に質問が飛び、水脈と地形が可視化された3Dマッピングの日吉の地形の変化に学生は魅了されました。

10月14日の自然編では、福山欣司先生(経済学部)が前回までの知識情報をまとめ、縄文人はどのように食糧を確保したのかという問いへ接続してくださいました。過去1万2千年の花粉分布図から主要な食糧と推定される種実類からスタジイをキャンパスで採集。1人5分の制限時間内で採取し、長沖暁子、持田浩治両先生(経済学部)の補助を得て調理試食。グループ採取平均値とカロリー計算の上、一日一人が生きるための労働時間を算出します。虫害や不作などのリスク要因も考え学生がはじき出した時間は37分から60分。縄文人は存外、食糧確保の時間を要しなかったのだろうか、という疑問がわいたようです。最後のメは、大出敦先生(法学部)によるテーマの絞り方講義。熟練の妙技で、マインドマップによる発散と収斂の技法によって、学生は講義、実験、討議を通して学んだ縄文を現代につなげ「縄文時代の技術進歩」「縄文と現代の労働」などのテーマに絞り込みました。

TA学生はモニター学生の議論を活性化し、グループ発表に向け、教員とアカスキ修了生による「学習相談」で連携。教養研究センターが培った教育の蓄積とノウハウをフルに活用するプログラムとなりました。2019年開講には寄附のお願い行脚など試練はまだありますが、プログラムは着実に手ごたえを感じる内容となりました。

(不破有理)



海岸線を地図に描く(10月7日)

情報の教養学

情報の光と影

2017年度の「情報の教養学」では、情報の光と影というテーマで開催しています。情報の利用による様々なメリットと共に、気を付けなければならない問題について、様々な分野の一流の講師に講演いただいています。

まず、松岡正人氏((株)カスペルスキー)は、「増え続けるサイバー犯罪、サイバー攻撃からどのように身を守るか」という題目でサイバー犯罪・サイバー攻撃の解説をされました。まずは、24のリスク項目をあげ、参加者がどの程度、それらをリスクとして認識しているのかを調査しました。その後、様々な事例をあげました。メールやWWWを通じた犯罪はもちろんのこと、最近話題となったランサムウェア、家電のハイジャックなど、広範に渡りました。

次に、福井健策氏(弁護士)は、「著作権の必須知識を今日90分で身につける!」という著作権入門をしました。具体的な例として、スイカ写真事件、マンション読本、五輪エンブレムをあげました。それぞれについて、参加者に著作権的に問題があるか否かを問いかけながら、講演が進みました。それを通して、著作権の意外な難しさがあがってきました。法的な意味での著作権はもちろん守らないといけない。しかし、近年のSNSの発達により、法的には「白(またはグレー)」であっても、SNS上では「黒」と断言され、炎上するケースがあります。その結果、安全志向に傾倒したり、創造性を削ぐような状況ができあがる、新たな問題の出現を解説しました。

最後に、手塚悟氏(政策・メディア研究科)は、「個人情報保護の漏洩とその対策」という題目で個人情報の解説をしました。情報漏洩にかかわる詐欺、個人情報保護法、ビッグデータなどの話がありました。特に、改正個人情報保護法が施行された直後の講演であったため、非常に注目すべき内容でした。また、個人情報に対する考え方は、国・地域によって異なり、特にヨーロッパでは個人情報を尊重しており、国別に法律を策定しても、国際的には凸凹があり、統一する難しさを述べました。

いずれの講演も、日頃、何気なく使っているインターネットにおける様々な落とし穴があることを知る機会として、非常に貴重な講演でした。また、参加者のアンケートを拝見すると、大変好評でした。なお、秋学期は、佐々木渉(クリプトン・フューチャー・メディア(株))、加藤真平(東大)、杉本麻樹(理工学部)の3氏から講演をいただいています。

(高田真吾)

2017年度情報の教養学第2回講演会
慶應義塾大学教養研究センター主催

著者 使用 著作権

著作権の必須知識を今日90分で身につける!

5月17日 18:15~19:45(水)

講師: 福井健策
弁護士(日本・ニューヨーク)
慶應義塾大学法律部、慶應義塾大学法学部教授、1994年東京大学法学部卒業、1997年慶應義塾大学法学部卒業、2001年慶應義塾大学法学部教授、2003年慶應義塾大学法学部教授、2005年慶應義塾大学法学部教授、2007年慶應義塾大学法学部教授、2009年慶應義塾大学法学部教授、2011年慶應義塾大学法学部教授、2013年慶應義塾大学法学部教授、2015年慶應義塾大学法学部教授、2017年慶應義塾大学法学部教授

会場: 日吉キャンパス(英理舎)1F
スクリーンシアター(大ホール)

対象: 教員・教職員(無料 予約不要)
問い合わせ: isawase@libarts.keio.ac.jp

「基本教養」になりました。危険な落とし穴や戒を避けつつ、不必要に委縮せず情報を使いこなすため、基礎から「使える著作権」を学びます。

主催: 慶應義塾大学教養研究センター

第2回: 福井健策氏ポスター

魂を見つめる4日間

今年度も8月29日から9月1日にかけて、庄内セミナーが山形県鶴岡市のTTCKを拠点に開催されました。今年度、庄内セミナーに参加した学生は27名でした。庄内セミナーは「庄内に学ぶ〈生命 (いのち)〉—心と体と頭と—」というテーマからも分かるように、生命に考えを巡らす3泊4日のセミナーです。ご承知のように鶴岡市には本塾の先端生命科学研究所があり、最先端のバイオテクノロジーの研究が行われています。その一方で、鶴岡市は出羽三山を抱え、修験の伝統が今なお息づいている土地でもあります。修験は山岳信仰、神道、仏教、道教、神仏思想などが混じり合った混濁的な信仰の体系ですが、その根底にあるのは、日本人のもっとも古い死生観だといえます。つまり鶴岡は最先端の生命観と最古の死生観が同居している不思議な土地です。こう考えると庄内の地は生と死について考えるにはうってつけのトポスでもあることが分かると思います。

さまざまな体験を通して生命についての気付きを得てもらうために、まずは、学生にマインドマップを作ってもらい、今の生命観、あるいは死生観を可視化してもらいました。その上で、独自の死生観を守り、そして育てている庄内地方を知ってもらうため、致道博物館館長の酒井忠久氏、庄内文化に精通した東山昭子氏を講師に招いて庄内文化を論じてもらい、旧藩校であった致道館では富樫恒文氏の指導で庄内論語を素読し、知憩軒では地元食材を使った伝統料理を味わいました。そうした庄内文化に触れつつ、メタボローム解析では世界的拠点となっている先端生命科学研究所では、最先端のバイオテクノロジーの一端に触れる一方、注連寺では即身仏を拝み、羽黒山では白装束に身を包み山谷を歩き、滝に打たれ、南蛮燻しの苦行を耐える修験を通じ、古代からの死生観を体感しました。そして夜はこうした体験を言語化するためにディスカッションが行われました。物理学から見た生命観について岡浩太郎氏(理工学部教授)が、古代の魂観については私が説明し、学生と議論しました。

さてこのセミナーを通じて、学生はどう変わったのでしょうか。最終日、気付きのために再び作成してもらったマインドマップの発表の様子を見てみると、数日前とは違い、参加した学生たちの奥底から言葉がわき上がってくるような勢いを感じました。その姿は、生について何か得たものを語ろうとしたくて、また同時にまだ言葉では明確に捉えられないもやもやしたものが新たに生じて、それを何とか言葉にしようとしているように私には思えました。(大出 敦)

第8回 庄内セミナー

「庄内に学ぶ〈生命〉—心と体と頭と—」

庄内での体験

この庄内セミナーという名前はどこか自己啓発セミナーあるいは怪しい宗教関係たるものを彷彿とさせますが、結論から言うと、断じてそのようなものではなかったことを強調したいと思います。そして、もし以下の文章を読んだ学生が、来年興味をもって参加してくれたなら幸いです。

庄内セミナーは、室内で講師の講演を聞いて議論することと、屋外で活動することの2種類に分けられ、数々の魅力的なアクティビティによって構成されています。この中で印象的だったプログラム二つについて感想を述べたいと思います。

まず講演の中で個人的に好きだったのが、理工学部の岡浩太郎教授の講演です。学生と教授の議論が非常に興味深かったです。生物とは何かについて学生と意見をやりとりしました。そして隣に座っている学生同士で、生命現象に対する問答を行うという素敵な時間を過ごせました。当然他の講師たちの講演もすばらしすぎて、ここには書き切れないです。

そしてこの夏の忘れられない体験のひとつとなったのが、山伏体験です。白装束を身にまとい、山(=冥界)に入り、そして出てくるという体験をしました。これは出羽三山の山岳信仰によれば生まれ変わりを意味しています。山伏体験を通じて、庄内に古くから伝わる信仰の概念、すなわち輪廻転生を感じ取りました。若者の自殺が目立つ日本において、庄内の性質は見習うべきではないでしょうか。

鶴岡という自然に囲まれた場所で、おいしい食べ物に恵まれながら活動できたことを光栄に思います。(理工学部2年 板倉慶直)



マインドマップ作成(8月29日)



先端生命科学研究所見学(8月30日)

第8回庄内セミナーは、山形県鶴岡市で開催されました。
実施期間：8月29日(火)～9月1日(金) [3泊4日]
場 所：慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス他
参加人数：学部学生26名、院生1名、スタッフ6名 合計33名
講 師：岡浩太郎(理工学部教授)、大出敦(法学部教授)、東山昭子(鶴岡総合研究所研究顧問)
参加費：無料 ※現地までの往復交通費は自己負担(現地集合・現地解散)
宿泊場所：休暇村羽黒(鶴岡市)

【関連企画】
・日吉メディアセンターとの協力で庄内関連図書展示(6/6～8/1)

スケジュール

1日目	・現地集合(鶴岡タウンキャンパス) ・「生命」に関するマインドマップ1作成 ・「庄内にまなぶ生と死」講師：東山昭子(鶴岡総合研究所研究顧問)
2日目	・即身仏拝観(注連寺) ・庄内藩校致道館で庄内論語の素読 ・先端生命科学研究所 バイオラボ棟見学 ・「シュレーディングから73年後に再び問う『生命とは何か?』」講師：岡浩太郎(理工学部教授)
3日目	・ミニ修験体験(羽黒山踏破、滝打ちなど) ・「修験と古代人の魂観」講師：大出敦(法学部教授) ・八朔祭見学
4日目	・マインドマップ2作成 ・懇親会 終了後現地解散



山伏体験修了式(8月31日)

カドベヤ

カドベヤの夏祭り

8月最後の火曜日。夏休みもいよいよ最後ということで、カドベヤの夏祭りを開催することとなりました。正しくは、カドベヤの大演芸大会。いつも火曜日にカドベヤに来てくれるメンバーそれぞれが、カドベヤで今までやってきたことや、個人の特技(?)を参加者と一緒に楽しんだり、紹介したり、というイベントです。今回は三田の岡原正幸先生の研究会のメンバーがカドベヤで行った交流会との合同で開催したために、新しい方々も参加してくれて、狭いカドベヤがいっぱいになりました。出し物はマジックあり、地唄舞あり、よさこいあり、シュールな歌やダンスもあり。とはいえ、今回のイベント開催の目的の一つはコミュニティ・アートの可能性を探ってみることであります。地元のアーティストをお迎えして、皆でカドベヤの歌を作ったり、病気で亡くなった大切なカドベヤメンバーだったOさんの残した歌でオリジナルの盆踊りを作って皆で踊ることで、その場で新たなものが生み出される楽しさを参加者全員で堪能しました。

たまにはこんなお祭りもいいものだね、といいつつも、毎回少しずつ新しい人々を受け入れていくいつもの静かなプロセスが、やはりカドベヤの本来的姿です。夏が終わって秋のカドベヤがまた始まります。

この夏は8月18日と29日の2日、岡原ゼミで「寿 Action!」を開催している学生さんがカドベヤで交流会を開催しました。普段は木曜日にはホームレスの方々の健康や安否を確認するパトロールに参加しているそうです。2日間だけではなかなか知ることはできない町と人。まずはかかわって、そこからアクションが生まれるのだと思います。また火曜日のカドベヤに学生さん方が来てくれることを心から祈っています。(横山千晶)

日吉行事企画委員会 (HAPP)

春学期の活動

日吉行事企画委員会(HAPP)は春学期に新入生歓迎行事を実施しています。秋学期には、塾生および教職員から企画を募集し、審査を経て採択した催し物を主催・開催しています。2017年度の新入生歓迎行事は、10の企画がスケジュールされました。毎年恒例となっている、舞踏の公演、塾名誉教授や著名者による講演会、塾長との交流を目的の一つとしている「塾長と日吉の森を歩こう」、複数回の演奏会を含む「日吉音楽祭」に加え、昨年に引き続き、日吉メディアセンターの中でコンサートが2回催されました。また、経済学部において、すべての授業が英語で開講されているPEARLが2016年度秋学期より始まり、これにともない、ある程度まとまった数の9月入学の新入生が日吉キャンパスに存在することとなりました。これに対応する形で、秋学期に行われる行事の数を増やし、また、日本語を理解しない学生にも対応できるイベントを行うこととなりました。ちなみに、企画公募の審査も無事終了し、審査の結果、2つの企画が採択されたのみでした。HAPPの活動の詳細は、ホームページをご覧ください。http://happ.hc.keio.ac.jp/ (石井 明)

2017年度新入生歓迎行事一覧

No.	企画名	日程
1	シヨブハナ・ラドハクリシュナ(Shobhana Radhakrishna)氏講演会 マハトマ・ガンジーの変革型リーダーシップと現代世界におけるその妥当性	4月17日(月)
2	江戸の伝統文化-歌舞伎芝居の今昔と、現代におけるその意味	4月22日(土)
3	【異端のすめ】～真の一流になるために～	5月15日(月)
4	ライブラリ-コンサート in 日吉 —図書館がコンサートホールになる2日間—	5月16日(火)・23日(火)
5	塾長と日吉の森を歩こう	5月20日(土)
6	体育科目紹介と筋肉診断	5月18日(木)・25日(木)・6月1日(木)
7	小林嵯峨舞踏公演～孵化する～	6月2日(金)
8	日吉音楽祭 2017	7月8日(土)・10月7日(土)
9	国芳の魅力—講演とミニ展示	7月28日(金)～10月31日(火)
10	英語で語る茶道の魅力—講演とワークショップ	10月28日(土)

教員サポート 「学生相談 事始め—学生理解と一次対応のために—」

2017年度の教員サポートは5月31日、前回に引き続き、大岡真希子氏、そして中村麻里子氏（ともに学生相談室カウンセラー）にご登壇いただいております。大岡氏の講演は「学生相談 事始め 学生理解と一次対応のために」と題するものであり、教職員から見て「気がかりな学生」がいた際、どのような対応をとるべきか、また、話の聞き出し方など実践に役立つ方法や、実際の事例（過食など）が紹介された。続いて中村氏より、学習相談室の組織、相談内容、来訪者の内訳などのデータ提示があり、こちらも有益な情報ばかりであった。その後、会場の教職員との質疑応答が活発になされた。

教員サポートは従来、秋学期後半におこなわれてきたが、多事な時期ということもあり、希望者の参加がかなわないという事態が生じていた。また、特に新任教職員の参加を促すため、今回は春学期前半に時期を移した。前回から間を置かず講義を担当いただき、ていねいな準備をしてくださった大岡氏、中村氏に深く感謝を申しあげたい。結果として今回は十余名の参加者に恵まれたが、個人的にこの数字には満足していない。知識の必要性に対し、現事業は自由参加型である。これまでの教員サポートでのノウハウを活かし、塾や日吉全体が主体となってこの種のサポートをより広く教職員向けに展開できないものかと考えている。（新島 進）

5月31日、来往舎中会議室において標記講演会を実施しました。日々学生たちと接する機会の多い教職員を対象に、学生相談（支援）のモデルとして「気づく→聞く→対応する」という3ステップの対応法を提案しました。学生への異変に気づく為に自身の目や感覚を使うこと、そして異変に気付いて話を聴くステップに進んだ際の環境の整え方や話を聴くコツ、さらに学生対応をする場面を①教職員が自身で対応する、②専門機関が対応する、③教職員と学生相談室が連携する、④話を聴いた教職員が専門家に相談する、という4つに分けて、それぞれの場面ごとに具体的な対応法や声かけの仕方、留意点等についてご紹介しました。

そしてそのように対応された学生が、その後相談室につながった場合にどのような相談経過をたどるのかについて、事例を通して紹介し、最後に日吉学生相談室の中村麻里子カウンセラーより学生相談室の利用者数や最近の学生の相談傾向、相談室の利用方法等について説明を行いました。今回は新任教職員の方も出席下さる会とのことで、「明日からでも使える対応法」というコンセプトで構成を考えました。お役立ていただけたら幸いです。

（大岡真希子）

学習相談

2017年度春学期 学習相談活動報告

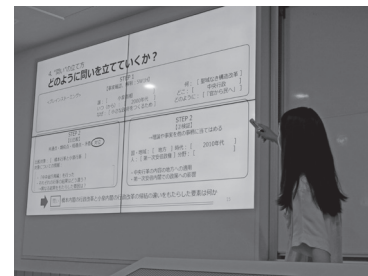
学部生、中でも学部の2、3年生が相談員の多数を占める本活動は、相談という対話を通じた、聞き合い、教え合う関係の構築を理念としています。今年度は、新規に10名の相談員が加わり、気持ちも新たに活動を始めました。学習に関する相談件数は昨年度より30件ほど増加し、とりわけ法学のレポートに関するものに集中したのが印象的です。その中で、友人から評判を聞いて足を運んだという、喜ばしい声も聞くことができました。

相談活動に留まらず、例年に引き続き開催した初學者向けのレポート講座「“問い”を立てて「調べ学習」の一步先へ」（6月23日、30日）では、1年生を中心に60名もの参加があり、大学における学習支援の需要の高さの一端を改めて感じる機会となりました。また、寄せられた相談内容から学生の「つまずき」を分析し、学習に役立つ資料の探し方や参考文献の書き方を案内する展示（6月29日～8月19日）を日吉図書館内で行い、多くの方の目に留めていただけたようです。これらの企画は、秋学期の実施も予定しています。

勉学に励む中での「つまずき」を共有できる場は、未だ多くありません。「半学半教」の精神を忘れることなく、塾生同士で学びの経験を分かち合う貴重な在り処として、2008年より続く本活動をこれからも展開して参ります。（日吉メディアセンター 田谷祐子）

「大学レポート」の本質を伝えたい

日々学習相談の業務を通じて学生と接する中で、そもそも大学レポートとは何か、という根本的な部分に疑問を持っている学生



レポート講座

が多いと感じます。高校までの調べ学習では調べた情報を羅列するだけでよかったものが、大学レポートでは調べた内容に加えて自身の主張や根拠が求められるようになります。自ら「問い」を立て、それに対する「答え」を導くことが大切ですが、そのやり方を大学は教えてくれません。

それならピア・メンターが大学レポートとは何かを伝えようという思いから、春学期の講座企画として「レポートの書き方講座—“問い”を立てて「調べ学習」の一步先へ—」を開講しました。例年大学生になって間もない1年生の参加が多い講座なので、今年度は、大学レポートの本質を伝えることを目指して講座を作り上げていきました。

参加者が能動的にレポートに求められるものを考えられるよう、2つのアクティビティをおこないました。まずは例題を用いながらレポートに求められる要素を個人で考え、大学レポートの構成要素を理解してもらいました。その後、参加者同士でディスカッションをしながら学問的な「問い」を立てるアクティビティをおこないました。講座後に「わかりやすかった」「もっと早く知りたかった」などと言っていたので、今後の学習相談でも多くの学生に伝えたいです。（法学部2年 尾崎由依）

研究サポート「研究の現場から」

〈第19回〉

権利と権力のあいだ

—現代中国の維権運動から考える—

改革開放政策が中華人民共和国にもたらした変化の一つは、人びとの権利意識の目覚めである。1990年代以降、多様な領域で繰り広げられた諸利益主体による権利侵害に対する抵抗と要求が維権（権利擁護の意味）運動である。メディアや知識人が加わって全社会を舞台に展開されるようになった維権運動は、次第に市民の基本的な権利を求め、新たな制度構築を要求するようになった。維権運動の台頭に対して、国家側（権力側）は合法的な権利を擁護することは提唱するものの、維権観に対する解釈権、維権行為に関する主導権の確保に力を入れるだけではなく、維権運動に関わる弁護士、活動家を拘束するなど、直接弾圧に乗り出した。権利と権力のあいだには緊張関係が見られた。重大局面を迎えている維権運動の今後の動向について観察し続ける必要がある。（呉 茂松）

〈第20回〉

中世イングランド宗教文学の世界

中世イングランドの文学は、チョーサー、ラングランド、マロリーなどを除いて、お世辞にもよく知られているとは言えません。しかし、14世紀から15世紀のイングランドは、豊かで長い伝統を誇るラテン語文化を模範として、数々の優れた作品を生み出しました。今回の発表では、その中でも宗教文学について私自身の研究内容に触れながらお話ししました。ひとくちに英語の宗教文学といっても、

ラテン語の正統的な宗教作品の逐語訳から、あまりに独創的であるためカトリック教会から異端とみなされてしまったものまで、多様性に富んでいます。発表では、このような英語の宗教作品が書かれた歴史的背景を踏まえた上で近年の研究動向についてご紹介するとともに、中英語宗教文学研究は他の諸分野の研究に対して何を示唆しうるのかについても簡単に論じました。（井口 篤）

【予告】〈第21回〉

2017年12月20日（水）18:15～ 来往舎101にて
西尾宇広（商学部）

「〈群集〉の文法—19世紀前半のドイツ文学を中心に—」

「研究の現場から」今年度3回目は、商学部の西尾宇広先生にお話し頂きます。どうぞご期待ください。

「研究の現場から」では、これまで毎回お二人の教員の発表が行われていましたが、毎回の充実したお話と、それに続く白熱する質疑応答に対して十分な時間的余裕が取れない傾向があったため、今年度第19回から毎回お一人としました。

この企画は年に3回実施しており、日吉の教員から普段の研究についてのお話を伺って、学部横断的な交流を育もうという趣旨で行われています。発表の後は自由な雰囲気に参加者が討議します。軽食も用意されるざっくばらんな会ですので、どうか気軽にご参加ください。（高橋宣也）

読書会推進企画「晴読雨読」

「晴読雨読」は、2016年度から始まりました。発案者は前副所長の工藤多香子先生（経済学部）です。教養をはぐくむ行為といえば一般的にはまずは読書であり、大学のゼミナール形式の授業の基本も輪読でしょうが、教養研究センターとはいうと、いかにも相応しい読書会を自ら催すことはなぜかずっとなかったと思います。そこで、授業の済んだ時間にも、学生や教職員が膝突き合わせて一冊の本を議論しながら読み込んでみる機会を、やはり教養研究センターが作ってゆこうというのが「晴読雨読」事始めだったでしょう。本の厚さにもよりますが、一冊を読み込むとなれば、最低でも数回はかかるものです。それから、民主的な読書会のありようを想定しますと、テキストとその日に読む範囲だけを決めて、みんなで勝手に読んできて、いきなり集まって内容について討論してゆくかたちが、ひとつの理想かもしれませんが、現実問題としてはなかなかそうも参りません。そこで「晴読雨読」は、教養研究センターの所員である教員の誰かがテキストを決め、案内役・導き役となって読み進める形式をとることにして、始まりました。そして大事なことは、「晴読雨読」を始めた所員なら、誰がいつからどんなペースで何回かけて何を読んでも、原則自由だということです。読書会の導き役を務める所員が仮に同時に10人居て、10本の読書会が並行して開催されていてもかまいません。部屋の手配や広報のサポートを教養研究セン

ターが行うのです。極端な話、毎晩、キャンパスのどこかで何かの本をみんなで読んで知的刺激を受け合えたら、それは教養教育を担う日吉キャンパスにとっての理想状態ではないでしょうか。それこそ「教養のユートピア」です。

しかし現実と理想とは違います。今のところは次から次へと、というペースでは行えていません。第1弾はエマニュエル・レヴイナスの『倫理と無限 フィリップ・ネモとの対話』を渡名喜庸哲先生（商学部）がガイドになって読むシリーズでした。2016年の4月から12月まで7回行われました。続く第2弾はブルーノ・ラトゥールの『科学論の实在—パンドラの希望』を荒金直人先生（理工学部）をガイドに読むシリーズで、2017年4月に始まって11月1日に第6回を迎え、継続中です。さらに第3弾として10月18日から田辺元の『懺悔道としての哲学』を読むシリーズを始めたところです。1回目は来往舎の大会議室で行いました。教養研究センターが日吉に読書会運動を巻き起こすべくには、所長か副所長をガイドにする読書会もやるべきだというのは、「晴読雨読」の企画段階からの工藤先生のアイデアで、それなので田辺元の読書会ではガイド役も副所長の片山杜秀（法学部）が登板しています。ついには日吉で毎晩のように、読書会が行われ、「教養の楽園」が現出する日の到来を願ってやみません。（片山杜秀）

【日吉学】全4回 過去から未来を紡ぐ日吉学「縄文編」

9月30日(土)、10月7日(土)、10月14日(土)、11月3日(土)、
13:30～16:45 ※11月3日(土)は午前～15:00頃、
来往舎1階103・104教室他

【日吉キャンパス公開講座】観光と開発

10月7日(土)～12月9日(土)全8回16コマ、
3時限(13:00～14:30)4時限(14:45～16:15)、
第4校舎J29番教室

【情報の教養学】第5回:加藤 真平(東京大学)

「完全自動運転:コンピュータはヒトを超えるか」

11月15日(水)18:15～19:45、来往舎シンポジウムスペース

【情報の教養学】第6回:杉本 麻樹(理工学部)

「超スマート社会における身体情報学:視線や表情の理解と共有を目指して」

12月6日(水)18:15～19:45、来往舎シンポジウムスペース

【研究の現場から】第21回:西尾 宇広(商学部)

「〈群衆〉の文法—19世紀前半のドイツ文学を中心に—」

12月20日(水)18:15～、来往舎101

慶應義塾大学コレギウム・ムジクム

古楽アカデミー 演奏会

1月13日(土)午後、協生館藤原洋記念ホール

ヘンデル《メサイア》全曲演奏会

2月6日(火)18:30～、協生館藤原洋記念ホール

【極東証券寄附講座アカデミック・スキルズ】

プレゼンテーション・コンペティション

2月予定、来往舎シンポジウムスペース

【教養研究センター選書出版】

2018年3月予定

ヒトと動物関係学会 学術大会

3月3日(土)、4日(日)、来往舎シンポジウムスペース

日吉キャンパス公開講座

2017年度のテーマは「観光と開発」です。今年が国連の「開発のための持続可能な観光の国際年」ということにも絡め、観光について、またそれに伴う開発について、塾内外の講師の方に、様々な内容で講義をお願いしています。残すところ2回となりましたが、12月2日は「食」の先進国を目指して(柳田利夫)と「スポーツ都市戦略」(原田宗彦)、12月9日は「月・火星における居住の可能性を探る」(新井真由美)と「観光事業家フレッド・ハーヴィーの遺産」(鈴木透)です(以上、敬称略)。
(山下一夫)

【多様な人々をつなぐコミュニティとアート】

シンポジウム&ワークショップ

11月29日(水)17:00～20:00、来往舎大会議室

基盤研究「教養研究」講演会 no.2 毛利 三彌

「教養と演劇:現代人にとって演劇は教養になるか」

12月12日(火)18:15～19:45、来往舎シンポジウムスペース

【学びの連携】大野 真澄(法学部)

「効果的な論文指導を目指して:英語論文編」

12月13日(水)18:15～19:45、来往舎中会議室

慶應義塾大学コレギウム・ムジクム演奏会

(合唱とオーケストラ音楽)

12月27日(水)18:30～、協生館藤原洋記念ホール

【学会・ワークショップ等開催支援制度】

春学期開催分募集 申請締切

1月31日(水)

学会・ワークショップ等開催支援

当センター所員が企画する研究会やワークショップ等を経費・広報の両面から応援する制度です。所員の方々が参加できる研究・交流の場を広げることを趣旨として、開催に伴う経費の助成や、日吉キャンパス内やウェブでの広報をお手伝いします。

募集は毎年2回、春学期開催分は1月末日まで、秋学期開催分は7月末日まで受け付けています。次回の締切は1月31日(水)です。ふるってご応募ください。なお、経費を必要としない広報支援については随時受け付けています。

私の仕事自慢

教養研究センターの出版物の制作を担当しております、慶應義塾大学出版会の飯田建と申します。「お前も何か自慢をせよ」とお声をかけていたのだいもの、この場にふさわしいことが言えそうになく困り果てています。お茶を濁します。

前職とあわせ15年ほど編集の仕事をしております。現在の職場では日本近代史や思想史などの諸テーマを中心に企画・編集をして参りました。執筆を依頼した方、出版を依頼して下さった方、それぞれの著者・執筆者との出会いや出版に至る経緯、刊行後の付き合いはさまざまですが、学問の最前線で対象に真摯に取り組む、という点では全員が一致していて、多くの編集作業は非常に楽しく、当方は敬意を懐きつつ仕事ことができました(先生方も楽しんでくださっていると良いのですが。そして本がもともと売れてくれれば)。

身体的につらいことが多いのですが—もちろん執筆の「産みの苦しみに」比べれば何でもないことは承知しています—、著者の断片的なアイデアがストーリーを得て、あるいは別々の機会に書かれた何本もの論文が体系化され、多くのプロセスをへて本のかたちになってゆくのに立ち会うのはとても刺激的です。そして、出来上がった本を手にとると、やはり疲れが飛びます。やりがいのある楽しい仕事を選んだと思っている、これがささやかな自慢です。
(飯田 建)